

水上藤悦先生を送る

石井正人

水上先生は東大文学部独文科の先輩ですが、初めてお会いしたのは、水上先生が秋田大学教育学部から千葉大文学部に移られた一九八五年でした。この年、経歴にありますように、水上先生は日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』編集委員に就任されました。私は当時東大助手で、この編集委員会の庶務係をつとめましたので、二年間一緒に仕事をさせていただいた次第です。

一五歳差とはいえ、水上先生は当時もうドイツ文学者としても大学教員としても堂々たるキャリアを持っておられる若手のホープでしたが、私の方は駆け出しで右も左もわからず、実務でへまをやらかしては、委員の先生方にご迷惑をおかけしたものでした。委員長の柴田翔先生をはじめ、水上先生も、皆さん後輩の失敗を笑って許してくださる方ばかりで、大変助けられました。

水上先生は研究にも教育にも管理実務にも、人一倍誠実に真剣に取り組まれる方である一方で、また物静かで、温厚・篤実なお人柄なので、一緒に仕事をする機会があると、本当にこちらがほっと気持ちがあんまりするようなパートナーです。このことは、もう三十年以上前になるあの学会誌編集委員会から、たまたま不思議なご縁で同僚になった千葉大文学部の諸委員会でも、変わらぬ水上先生の影響です。

近現代のドイツ語詩歌を専門とされ、言葉を大切にしながら一字一句を精密に読み解いていく研究スタイルを基本としながらも、生来穏やかで優しいお人柄から、研究も授業もいたずらに厳格なものにはならず、暖かくそつと軟着陸するような趣があり、学生たちからも信頼され、慕われていました。

伝統的で安定したドイツ文学研究、外国文学研究の王道を継承する水上先生の教育研究でしたが、水上先生の世代が大学運営の中心となる世紀転換期前後から、大学は大きな荒波にもまれ、人文科学や文学部が厳しい試練にさらされることになったのはご承知の通りであり、特に伝統的な語学文学研究は存亡の危機に立たされたといっても過言ではありません。伝統的な独文学研究を継承された水上先生にとって、折角築き上げてきた大切なものが次第に崩れ、消えていくような悲嘆の思いをぬぐえなかったのではないかと推察します。国立大学において事態がますます悪化するばかりの現状を見るにつけ、最後の騎士ならぬ、最後の独文学者、最後のゲルマニストと、水上先生をお呼びしたいと思いますが、決して失礼なことではなからうと信じます。

けれども、テキストをきちんと読解し、文学を大切に解釈することは永遠であり、このような伝統を無視したところにはいかなる改革も改組もなく、長い目で見てかならず破綻と揺り戻しがあります。その時まで、たとえ現場を離れても、文学研究の灯を守っていてください。

お世話になりました。お元気で。

水上藤悦先生 略歴

一九五二（昭和二七）年六月五日 山形県尾花沢市 生

学歴

- 一九七一（昭和四六）年三月 山形県立山形東高校卒業
- 一九七一（昭和四六）年四月 東京大学教養学部入学（文科三類）
- 一九七六（昭和五一）年三月 東京大学文学部独文学科卒業
- 一九七六（昭和五一）年四月 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻（修士課程）入学
- 一九七八（昭和五三）年三月 同修了（文学修士号取得）

職歴

- 一九七八（昭和五三）年四月 秋田大学助手教育学部採用（ドイツ語）
- 一九八〇（昭和五五）年五月 ドイツ学術交流会（DAAD）奨学金留学生として西ドイツ（ボン大学）へ出張（昭和五七年三月まで）
- 一九八〇（昭和五五）年十月 秋田大学講師教育学部に昇任（昭和六十年三月まで）
- 一九八五（昭和六十）年四月 千葉大学助教授文学部採用

- 一九八七（昭和六二）年四月 千葉大学大学院文学研究科（修士課程）授業担当（ドイツ文化論）
二〇〇〇（平成十二）年十月 千葉大学大学院社会文化科学研究科（博士課程）授業担当（言語文化変容論）
二〇〇一（平成十三）年十月 文部省長期在外研究員としてオーストリア（ウィーン大学）、ドイツ（フンボルト大学）へ出張（平成十四年七月まで）
二〇〇三（平成十五）年四月 千葉大学教授文学部に昇任、現在に至る

非常勤講師

- 一 東京大学文学部（一九九三年、一九九六年～一九九七年）
一 東京大学教養学部（一九九一年～二〇〇一年）
一 明治大学文学部（二〇〇五年～二〇一六年）

学会及び社会における活動

- 一九七八（昭和五三）年四月 日本独文学会会員（現在に至る）
一九八五（昭和六〇）年～一九八七（昭和六二）年 日本独文学会編『ドイツ文学』編集委員
一九九五（平成七）年五月 DAAD友の会『ECHO』編集委員（現在に至る）
一九九九（平成十一）年七月～二〇一三（平成二五）年三月 日本ツェラン協会会員

賞
罰

一九八四（昭和五九）年五月
ドイツ語学文学振興会奨励賞

水上藤悦先生を送る

水上藤悦先生 研究業績

著書

- 『感覚変容のディアレクティク』（共著、一九九二年六月 平凡社 三八三頁）
『ヴェトゲンシユタイン読本』（共著、一九九五年十月 法政大学出版社 三八二頁）
『ツェラーン研究の現在』（共著、一九九八年三月 中央大学出版社 四三九頁）
『狂気のデイスクルス』（共著、二〇〇六年二月 夏目書房 二七八頁）
『ツェラーンを読むということ』（共著、二〇〇六年三月 中央大学出版社 五四六頁）

論文

- 「リルケとユーゲントシユティール」（一九七七年一二月 東京大学文学修士論文 未公刊）
「詩劇の可能性―世紀末詩劇の生成に関する覚書」（一九八〇年三月『詩・言語』一五号 三〇―三三頁）
「劇作家としてのリルケ―リルケの初期戯曲作品について」（一九八三年十月『ドイツ文学』七一号 一〇八―
一一七頁）
「内面性の貧困―リルケの『時禱詩集』について」（一九八五年二月『秋田大学教育学部研究紀要』三五集 七
三―八八頁）
「リリエンクローンの『現代』（一九八六年三月『千葉大学人文研究』一五号 一三二―一六四頁）

- 「通り過ぎていく女」との出会い」(一九八七年三月『千葉大学人文研究』一六号 七三～一一一頁)
- 「終末のユートピア・ユートピアの終末」(一九八九年三月 東京大学科研費研究成果報告書『ドイツ文学における《ユートピア的なもの》の位相』三八～六一頁)
- 「悲喜劇とグロテスク様式」(一九九〇年三月『千葉大学人文研究』一九号 五五～九八頁)
- 「エレクトラの「死と変容」」(一九九二年三月 東京大学科研費研究成果報告書『ドイツ近代における女性論に現れる女性像の変遷』六六頁～九一頁)
- 「大衆社会のなかの詩人」(一九九三年三月 千葉大学科研費研究成果報告書『日独近代化過程の比較文化的的研究』一三一頁～一四二頁)
- 「マウトナーの言語論と世紀末文学」(一九九四年三月『千葉大学人文研究』二三号 二三九頁～二七二頁)
- 「世紀末の室内とP・シエーアバルトの「ガラス建築」」(一九九五年四月『ドイツ文学』九四号 一二二頁～三二頁)
- 「一八世紀における「人間性」の限界」(一九九六年二月『一八世紀ドイツ文学研究』五号 一六一頁～一七八頁)
- 「ディルタイのゲート受容―体験と文学―について」(一九九七年『ゲート年鑑』三九卷 一〇九頁～一二七頁)
- 「「深みに沈む」―ツェラーンの詩作と翻訳について」(一九九九年七月『ツェラーン研究』一号 六三頁～九〇頁)
- 「政治的ゲート」についての覚書」(二〇〇〇年一二月『一八世紀ドイツ文学研究』六号 八四頁～一二〇頁)
- 「パウエル・ツェラーンの「妄想」」(二〇〇二年七月『ツェラーン研究』四号 五九頁～八七頁)
- 「詩集における固有名の問題」(二〇〇四年五月 日本独文学会研究叢書二五号『詩人はすべてユダヤ人』四三頁～五六頁)

「パウル・ツェラーンの『最初の詩集』について」(二〇〇四年七月『ツェラーン研究』六号 一頁～二二頁)
「一八世紀ドイツの知識人とフリーメイソン」(二〇〇四年九月 日本独文学会研究叢書二六号『一八世紀ヨーロッパのなかのドイツ文学』 五六頁～六七頁)

「ドイツ近代詩における『戦慄の美学』」(二〇〇五年一〇月『ドイツ文学』一二五号 七三頁～八五頁)

「パウル・ツェラーンとともに『夜と霧』を読み直す」(二〇〇九年三月『千葉大学人文研究』三八号 七五頁～九八頁)

「詩人と専制君主ゲーテの『西東詩集』について」(二〇〇九年七月『東北ドイツ文学研究』五二号 二五九頁～二八〇頁)

「ツェラーンとハイデガーというテーマをめぐって」(二〇〇九年八月『ツェラーン研究』一一号 四九頁～六一頁)

Auschwitz und Hiroshima - Überlegungen zu Celans "Hiroshima-Gedichten". 10. 2010. Celan-Studien in Japan. Deutsche Sonderausgabe 2010. S. 57-75.

「ツェラーン詩集『言葉の格子』全注釈(一)」(二〇一二年七月『ツェラーン研究』一三三号 九三頁～九六頁、一七七頁～二二〇頁)

「パウル・ツェラーンの『最後の詩集』をめぐって」(二〇一六年三月『千葉大学人文研究』四五号 一頁～三一頁)

「パウル・ツェラーンのブカレスト詩編について」(二〇一八年三月『千葉大学人文研究』四七号 一九一頁～二二三頁)

書評

「パウル・ツェラーン／クラウス、ナーニ・デームス『往復書簡集』について」(二〇一〇年一〇月『ツェラーン研究』一二号 三二頁～四一頁)

「パウル・ツェラーン『ラインの友人たちとの往復書簡集』について」(二〇一三年三月『ツェラーン研究』一四号 七九頁～九七頁)

「ブリギッタ・アイゼンライヒ『ツェラーンの白墨の星』」、「パウル・ツェラーン／ギーゼラ・ディシュナー『往復書簡集 遙か彼方からのように君のもとに』」(二〇一三年三月『ツェラーン研究』一四号 九九頁～一〇五頁)

その他

「ヴァント先生を追悼する」(二〇一四年三月『千葉大学人文研究』四三号 一頁～一四頁)

「五月連休と近くの千葉」(一九九九年七月『BRUNNEN』三九八号 六頁～一〇頁)

『ドイツ語―一つの出会い』(共著 二〇一一年二月 同学社 七〇頁)